同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と松田甚次郎・宮澤賢治（４）
郷里新庄鳥越部落に帰った松田甚次郎
自ら小作人となり賢治精神を実践

若尾　紀夫（C昭39・院41）

盛岡高等農林学校農学別科を卒業（昭和２年３月）した松田甚次郎（以下甚次郎）は、宮澤賢治（以下賢治）から「小作人たれ」「農村劇をやれ」（昭和２年３月８日）と諭され、郷里山形新庄に帰り自ら小作人となり、賢治精神を実践、農村指導者として活動することになる（20）。

甚次郎は、疲弊していく農村農民の生活を守るために、最上共働村塾の開設、隣保館の建築、託児所や共同施設の設置、消費組合の組織化など行った。禁酒や婦人の地位向上にも力を注ぎ、衣類や味噌などの食品の自家生産や缶詰加工など自給自足的農業経営を実践した。また10年間の生活記録をまとめた回顧録『土に叫ぶ』（１）及び賢治作品を紹介した『宮澤賢治名作選』（４）などを著わした。

本報では、前報に引き続き著書『土に叫ぶ』を中心に甚次郎の活動、甚次郎の農民運動などについて紹介する。

有栖川宮記念厚生資金の授与と鳥越隣保館

昭和８年１月14日、「有栖川宮記念厚生資金」第一回の授与が決まり、昭和８年２月11日、甚次郎は山形県庁での伝達式で高松宮家から有栖川宮記念厚生資金を受けた。表彰状には、「協力一致風教ノ振作及共同施設ノ発達ニ努メ成績見ルベキモノアル趣」と表彰理由が記されている。

有栖川宮記念厚生資金が授与されると、それまでの甚次郎に対する世間の見方（甚次郎の活動に対し左翼的危険思想ではないかとの風評や官憲の圧力など）が一掃され、甚次郎にとっては追い風となった（注１）。

有栖川宮記念厚生資金授与の栄誉を永く記憶に留めるために、鳥越に共同記念館を建てることになり、部落の協力と県の援助があり、昭和８年10月30日、「鳥越隣保館」が落成した。

鳥越隣保館では部落の様々な活動が行われた。農繁期託児所・共同炊事場・共同風呂・講習会・敬老会・夜間青年学校・麹室の設置（製麹や醤油共同製造）・物品の共同購入と分配・婦人愛護運動（女子部の設置と禁酒運動）・母の会の活動（出産育児相談や裁縫塾）などである。このように鳥越隣保館は、鳥越部落の老若男女や乳幼児までお互いに睦み、文化の向上と産業の発展に貢献した。甚次郎の活動は多くの新聞や雑誌で取り上げられ、全国的に注目されるようになる。

注１：「高松宮家」より出された「有栖川宮記念厚生資金」は甚次郎の生涯にプラスの影響を与えた。同時に「餌（上記厚生資金）をもっていとも簡単に権力の側に釣り上げられた」との風評もあったという。

最上共働村塾の開設

小作人になった甚次郎は、「小作人でも貧乏人でもよいので、毎日純真な青少年と寝食労働を共にして修行したい。」と早くから夢を抱いていた。

甚次郎の活動を知った若者たちが全国各地から集まり、昭和７年春、「自治共働・切磋琢磨して人生問題や農村問題を語ろう」と言うことになった。そこで、鳥越の古い小屋（元営林署の番小屋）を借りて塾舎とし、最上共働村塾（青年農業研修塾）と名付け、昭和７年８月14日から２週間の短期村塾が開かれた。これが最初の村塾である。

「最上共働村塾」との名称には、多くの住民がお互いの役割と責任を認め合い相互関係を深めながら「最上地方において共に働き共に行動する（共働）」という意味が込められていた。このように「共働村塾」は甚次郎ら若者たちの「自治と共働」との考えから誕生したものであり、甚次郎の根本的思想の具現である（13）。

塾生（定員10名）は、男女学歴は不問、20歳前後、農村の中堅で純真な者。朝４時に起床・掃除・草刈

り・駈足・体操・天明礼拝・朝食。午前中は社会・政治・農業経営等の学科について論じ、午後は畑仕事や堆肥作りなどの実習。夜は共働村塾の経営・行事・学科などの打合せ、研究会・座談会・読書などが行われ、若者たちの育成に努めた。

期間：４月１日より（翌年）２月末迄の11ヶ月間

年中行事：４月１日：入塾式、６月中：田植帰宅：９月中：取入期帰宅、10月中：県外修行旅行、２月中：冬期視察、２月末日：終了式

学科：農産加工・有畜農業・立体農業・経済学・国史

実習：畜産（緬羊・豚・鶏・蜜蜂・馬牛）
農産加工（醸造・澱粉加工・羊毛加工）
農場（立体農業・飼料作物・蔬菜・果樹・水田・普通作物）

最上共働村塾設立の趣意

甚次郎は最上共働村塾を設立した趣意を次の様に記している（昭和７年８月）。この趣意書から、若い甚次郎の村塾の思想や高揚した意気込みがみられる。

「第一回の村塾に草案した塾の設立趣意書の要綱」

「社会人類の基本である農村は、今や死に瀕し、絶望と悲嘆の声が高まる。農村の荒廃は国の運命を支配し、社会の基礎を左右する。農村をどん底から興隆させるには農村に真摯な人物を望んでやまない。郷土・部落を思い、全農村を思う信念のある実践の人物がいなければ、国家も社会も繁栄しない。希望もなく信念もなくたゞいらいらした不安の人々のみでは、農村も社会も国家もどうして繁栄しようか。

第一は本物の人間である。村塾は現在の学校教育の弊害を徹底的に矯正する人格教育であり、勤労教育であり、生活の訓練である。一定の教科書とか、入学試験とか、授業料に関与せず、真に人類と祖国を愛し、村を愛し、土を愛し、隣人を愛し、永遠に真理を探究してゆく純潔な若人たちと全生活、勤労を共にし、その実践を通して科学的に研究し、各自の個性能力を確認し、以つて自家の職分と生活の合理化、経営の最善に努力し、社会生活はどのようなものかを明らかにしたい。このような人格的な努力奉仕から、やがて我が国民文化の建設と農民道が確立する。

経済生活から見ても、今日の様な農村の危機に際しては、その事情を探究し、且つ自給自足的集約経営や有畜山岳立体農業経営を研究し、山岳日本国土の永久的発展にまで進めたい。次三男の青年に、満鮮の荒野に耕作出来る拓殖訓練を授け、強烈な皇国精神の発動を以つて、農村のどん底の立場や、不景気、失業苦のない明るい社会を招来するまで努めなければならない。各々の立場を意識的に分担し、お互いに信じ、共働し、隣保し、以つて日本農村を全人類に先駆する正しい皇道日本としなければならない。

新しい時代にはその時代に先駆する人物と組織を要求する。破滅に瀕する農村を更生させ、苦悩に充ちている祖国をほんたうに救ふものは、若き純真な先駆者である。我等は、かゝる社会的に重要な使命より青年教育革新の立場から、全国の村塾教育家諸賢の教示を仰ぎつゝ、共働の士の協力に依つて、鳥越の山麓の風光に共鳴しつゝ、開塾した次第である。」

昭和８年３月、塾生たちは新しい最上共働村塾舎の建設に取り掛かり、４月12日に２階建の塾舎が落成した。多くの塾生たちが最上共働村塾で学び巣立って行った。ところが昭和初年頃から農村は深刻な不況におちいり、甚次郎の実家や村塾は、経済的に殆ど破綻状態となり近親の家々は次々と倒産していった。そのため父親から「財政的な事情から一旦塾を休止してくれ」とのお願いがあり、昭和11年７月20日、塾経営は閉鎖解散となった（13）。

塾舎「土に叫ぶ館」の再建と焼失

その後、甚次郎と塾生たちは新しい塾舎の再建に立ち上がった。場所は実家近くで、甚次郎が塾舎の設計を行い、昭和13年11月に本格的な作業に入った。建設は殆ど自前であった。塾舎再建には、多くの人々からの資金資材の支援があり、昭和14年１月10日に塾舎「土に叫ぶ館」が完成。村塾は「故宮澤賢治先生を塾長・善き師」として再出発し、新入生12名を迎えて入塾式をあげた。

ところが、昭和14年５月27日、不幸にも新築したばかりの塾舎が炎上し全てが焼失してしまった。甚次郎らの失意の中、塾舎の焼失は新聞やラジオで報ぜられ、全国各地2,000名以上の人々から激励と見舞金（注１）が寄せられた。塾生等は土工になり大工になり左官になり塾舎の再建を進めた。７月20日には小磯 拓務大臣と松岡 拓務次官が激励のために部落に立ち寄り、塾生たちは大いに感激し上棟式を急いだ。

甚次郎はいう。「塾舎の焼失は大きな試練であり教訓である。多くの形あるものは失われ宇宙の微塵

となり果てるが、燃やしても燃えないもの流しても流れない金剛があることを教えられた。全てを失ったが、不死の塾長（注：宮澤先生）が居るのだ。」、そして塾舎２階の一間を宮澤先生の仏間とした(13)。昭和14年12月３日に「土に叫ぶ館」の再建落成式が行われた。

注１：盛岡高農の在校職員学生400名からも「直ちに再建の準備にとりかゝれ」と過分の見舞金が贈られた（13)。
その時の記事が盛岡高農『同窓会報 第53号』の会員動静欄に載せられている（５)。甚次郎が学んだ盛岡高農においても、新庄鳥越における甚次郎のはなばなしい活躍やベストセラー『土に叫ぶ』が周知され、盛岡高農教職員学生400人が募金71円68銭を見舞金として贈った。

「松田甚次郎君（昭和２年卒)：宮澤賢治君（大正７年農学科２卒）の思操によつて君を今日あらしめた動起となつたことは『土に叫ぶ』によつて会員諸兄の既に承知の処ですが苦難血みどろの生活となつて出来上がつた「土に叫ぶ館」は不幸不在中に全焼し全くお気毒な状態に立入つたのであります。而し凡人はこれにて万事休すの運命観に止まるところ君に於は天の試練此の上とも積もれかしと一段と志操を確められ焼跡の片付けから再建にと人間業以上の奮闘が続けられつゝある由、何とかして一日も早く君の努力の報ゆらるゝを冀ふのみであります。概して観るに忍びずの感は云はずして母校内に漲り母校職員並びに在学生全部の賛意成り多事多端の折柄七一円六八銭也の復興資金を醸出義損された。何卒君の健康を祈り志を強くされて興亜農村の発展に一段の努力をさる様御願ひする次第である。」

甚次郎の座右の銘『水五則』

『水五則』は最上共働村塾の心得「修業の箴言」「事業達成の指針」である。

一　自ら活動して他を働かし得るは水なり
一　常に己の進路を求めて已まざるは水なり
一　障礙に遇ひて激しくその勢を百倍し得るは水なり
一　自ら深くして他の汚れを洗ひ清濁併せ容るゝは水なり
一　洋々として大洋を充たし、発して蒸気となり、雲となり、雨と変じ、霰と化し、凝つて玲瓏たる鏡となり、しかもその性を失はざるは水なり

「凡そ人事の常、何事か為さんとすれば、己れまづ率先して事に当り、それから他人を追随せしむより外はない。事を成さんとするものは、常に確固不動の信念の下に事業の遂行に努力邁進すべきである。種々の障礙に遭遇するときは百倍の勇気を以つて事に当たらなければならない。大事を成さんとする者は、先づ己の潔白を以つて他を清め、已むなくば寛容の度量を以つて、清濁併せ呑むの覚悟がなくてはならない。常に広大無辺の心境と、時に応じ千変万化融通無碍なるを要する。しかしその本性を失う事なく、常に明朗な本質を失はぬことが最も緊要である。」

婦人愛護運動：社会への女性参画

甚次郎の功績の一つは、社会への女性参画の礎を築いたことである。具体的には、甚次郎は昭和初年から10年間にわたり多くの婦人の指導者・救援者（村井女史・住井すゑ・奥むめお・増子あさ等）（１, 13）を得て、様々な農村婦人運動を展開した。

「農村の啓蒙には、女子部を結成して教育しなくてはならない。」との考えで鳥越倶楽部内に女子部を設置（昭和４年）し、農村劇や盆踊りなどを行ったが、それらはどちらかと言えば非生産的であり、教育は産業的な面も伴わなければ婦人としての教育ではないと考えた。

隣保館を利用して女子部の活動が行われた。女子部の婦人に体験的実務を勧め、共同畑を自主営農して穀物の栽培と収穫に携わり、また畑耕作のため女子馬耕講習を開催した。

甚次郎は、その時代と社会をよく認識し、多方面にわたる婦人愛護の立場から、共同精神をもって種々の事業を行った。出産の講習と助産（鳥越出産相扶養会)、農繁期託児所（乳幼児の育児)、農繁期共同炊事（栄養改善と労働能率の増進)、農繁期共同浴場、衣服の改善（羊毛資源の涵養：ホームスパン技術の習得と衣服の縫製)、住居の改善（暗くて不自由な台所の改善)、協働消費組合の設立と日用品共同購入、麹・味噌・甘酒・砂糖・缶詰などの共同製造、蕎麦の栽培と食活用などである。

甚次郎の農業経営主義と実践活動：自主農村が建設

「日本の本当の農業は、家族的に勤労し、社会的に協働し、自作、自営、自給独立の過剰生産を以つ

て、社会国家に献ずるの真意義をさとるにある。そうすれば自然と衣食が足るのである。営利主義的個人主義的経営は如何にこれを合理化した処で、直ちに行詰つて来るのである。研究し、努力し、魂を磨き、たのしく、面白く、すがすがしくした気持で社会的に協同し、以つて自給自足の合理的生産をなすことが、私の主義方針である。」

「私は、一介の小作農の体験を以つて、隣保愛助と研究創造の精神で、効率な小作料を支払いながら、小家畜から大家畜に至るまで、農産加工から山岳立体農業まで協同すべきときは協同し、孤軍奮闘すべきときは独り奮起して十年間進んで来た。しかし現在の小作人小農は〈働けど働け出ど、食う米作りて、食らうに困るなり〉であつて、いつ救われるか解らないのであるから、そこに社会事業や婦人愛護運動や青年教育などが起つて来て、ここから協同し、自給計画をたて、土地解放運動が起るのである。そこに本当の自主農村が建設される。」としている（1）。

このように甚次郎の農業経営は非営利的自給自足主義であり、「研究し、努力し、魂を磨き、たのしく、面白く、すがすがしくした気持で協同して自給自足の合理的生産をすること」と「小作農民が社会事業や婦人愛護運動や青年教育などで協同して自給計画を進め、それによって自主農村の建設と土地解放運動が可能となる。」と論じている。

甚次郎は六反百姓として恩師である賢治の教訓「小作人たれ」を実践し、小作問題の研究や農村問題・農業経営の研究と実践に真剣に取り組んだ。甚次郎は自主農村の建設のために種々な自給自足政策を実践し、その成果を『土に叫ぶ』で詳細に述べている（1）。

＊金肥の全廃と自給肥料の増産

花巻農学校では、実習地の水田（6反歩）に陸羽132号を栽培していた（8）。羅須地人協会時代、昭和3年頃には、賢治は従来品種の亀ノ尾や愛国に代って陸羽132号の栽培を奨励している。陸羽132号の育種開発と賢治との関係については、原子内等（12, 14, 15, 18）の論述がある。

冷害や稲熱病に強いといわれた陸羽132号は、金肥（化学肥料）に対応して育種開発された品種のため金肥の施肥が必要であった。そのため裕福な農家は金肥を使うことができたが、貧しい小作農民には金肥を買う余裕はなくかえって負担になった。「農民は肥料をクスリのように大切に扱い、肥料の三要素も知らない。」「私も肥料設計をしてもらいましたが、なんせその頃は化学肥料が高くて、わたしどもには手が出ませんでした。」との桜部落の伊藤忠一の証言（11）からも、その当時の農村事情が想像されよう。

それに対して、甚次郎は身近にあるさまざまな有機資材（藁・落葉・川芥・鋸屑・牛糞・熊笹など）に下肥を混ぜて醗酵させて有機堆肥を自作した。金肥を使わなくても自作の有機肥料で土地を肥やすことで充分な収穫が期待された。甚次郎は基本的には賢治の農法は継承せず、当時の貧しい小作農民の実態に即した有機農法を実践、しかも成果を挙げた。金肥を使わない有機農法は循環型農法（エコロジー農法）であり、今話題の持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）を先取りしたものである。

＊緬羊とホームスパン

衣服の自給のため、緬羊を飼育し自ら発明した「松田式紡毛機」で羊毛からホームスパンを紡いだ。

＊蜜蜂

養蜂によって得られた蜂蜜を飲用や様々な加工品とした。

＊家畜と飼料とサイロ

農地の耕作に用いる耕馬の育成を行い、また豚や牛を飼育して糞尿は堆肥醗酵に用いた。飼料は自給すべきとの考えで、醤油醸造や澱粉製造の搾り粕、野菜屑などを利用した。また様々な飼料作物を栽培し自分で構築したコンクリートサイロで醗酵させて飼料（エンシュレージ）とした。

＊養鶏

養鶏を取り入れて産卵の栄養利用と鶏糞による土壌の肥沃化を図った。

＊山岳立体農業

山岳地帯の開拓と立体的農業の推進。国有林と部落有林の開墾、樹木の植栽と林業経営の重要性を唱えた。山の恩恵（大豆・西瓜・小豆などの栽培、落葉肥料の生産、木材の生産、家畜の放牧、治水など）を積極的に利活用した。

＊農産加工

農家の自給自足経済の確立に必須な農産加工品（麹室の建築。製麹と甘酒や醤油などの麹加工品）を製造した。

＊醤油・味噌の醸造、澱粉・水飴・缶詰の製造

自家製の大豆・小麦・ライ麦・玉蜀黍・米糠などを原料として醤油・味噌醸造を試作研究した。また澱粉（屑芋から片栗粉生産）・水飴（米や甘藷から生産）・食用油（菜種）、缶詰（葡萄シロップ・グリンピース・トマトパルプ・鶏肉・兎肉・茸など）を製造した。

甚次郎は賢治没後に花巻を訪問

賢治没後も、甚次郎は賢治を生涯の師と仰ぎ宮澤家と交流を続け、花巻や盛岡を頻繁に訪問している。時系列的に整理すると以下のようになる。

＊昭和８年９月21日：賢治逝去

＊昭和11年11月21日：賢治詩碑「雨ニモマケズ詩碑」の建立

＊昭和11年11月23日：除幕式。毎年命日にこの碑の前で賢治祭が催される。

＊昭和13年11月13日：賢治詩碑と賢治の実家を訪ねる。

この日午前７時、甚次郎は吉田コトと佐藤しまを伴い、賢治詩碑前で10年間の業績を報告し自著『土に叫ぶ』を捧げた。その後賢治の実家を訪れて仏壇に礼拝し両親等に挨拶した。午前11時花城高等小学校で「賢治の会」主催の賢治先生を偲ぶ会で講演。午後の座談会には、学校の教員・農村青年・町の有力者・宮澤先生の教師・花巻農学校の卒業生など70余名が参加した。

＊昭和13年11月14日：岩手県六原青年道場を見学する。

六原青年道場は、石黒英彦知事の提唱により、昭和７年胆沢郡相去村六原（現金ケ崎町六原：岩手県立農業大学校がある）に創設された修練道場。日本精神錬成の訓育を施し、岩手県の振興と皇国の興隆とに貢献する地方中堅人物を養成することを目的とした。

＊昭和13年11月14日：母校盛岡高農を訪問。その時の様子が同窓会報に掲載されている。

・母校の学生400名と先生方に12年間の生活と賢治について講演する（６, 13)。

・松田甚次郎の動静（２）

「松田甚次郎君（昭二）：昭和二年農学別科を卒へ直ちに山形県最上郡稲舟村に帰農せられ爾來十有余年問村更生のため死闘を続けられしに其の努力酬いられ実蹟顕著なるものあり今や日本農林の松田として社会の注目する處となれるは寔に御同慶の至りに不堪る所であります。

即田澤義輔氏、小野武夫博士、企画調査官田中長茂氏、農林省副業課長見坊氏、文部省社会教育官水野氏、学術振興会松岡均平氏、友松圓諦氏等知名の士何れも鉄の意志に感嘆せられ、特に多忙の中に『愛郷愛土 土に叫ぶ』の書を公にされ羽田書店及び岩波書店より発行定価一円八十銭するに至れるは亦吾々の多謝する處にして本書は政治家は勿論総ゆる階級の人士に学生に農村問題の核心を把握せしめ農業の何たるかを感得せしむるに適切無比とさへ絶讃を得られ居らるは亦同君の誉とも称すべきものならん」

・母校に於ける松田氏講演（３）

『土に叫ぶ』の著者本校別科昭和二年卒業生松田甚次郎氏は十一月十四日午後一時より第一講堂（注：現農業教育資料館２階）に於て農民生活の体験に就て約二時間半に亘り講演された。

・松田甚次郎の動静（３）

「松田甚次郎君（昭二）：前号（２）に於て真に農村を愛する君の努力が漸く世に認められたるを祝し一段の努力を祈つておきたる所十一月十四日君を今日あらしめたる恩師宮澤賢治先生（大正七年農学二部出身物故会員）の墓参のため花巻に到来されたるを期会に母校講堂に於て後進のため第一講堂に於て盛大なる講演会を催さる。二時間余に亘る長時間の血の滲む過去の体験談と宮澤主義に一堂感激の場面を呈す。君の満足は勿論なるも吾等亦慶びを共にし君の努力を冀ふものである。當日農学実科生との座談会、少年刑務所の視察後多賀会館に於て顧問上村閣下を始め母校先生の御賛同を得て同窓会主催晩餐会（注１）を催し引続き「宮澤賢治の会」を中心に老若男女各方面の人士との座談会ありて其夜一時半に休み十五日朝五時みそぎ（冷水浴）の業を終へ詩聖啄木の碑に参り帰郷さる。各種団体より君の講演等を乞ふもの多かりしも十六日屋根葺準備の予定がある百姓の故を以て明日の光を求めて折角の懇望を断てる君の経済と時間の余裕なき御心中察するに余りあり、特に御健康を祈る、全国農村更生、農民学創造のため御努力を乞」

注１：母校での講演後、甚次郎の母校来校を祝い、盛岡で有名な県公会堂多賀会館（フランス料理レストラン）で同窓会顧問上村閣下（盛岡高農第４代校長 上村勝爾：昭和６年４月～昭和18年10月）を迎えて同窓会主催の晩餐会が盛大に開催された。

＊昭和13年11月14日：農学実科生との座談会の後、少年刑務所を見学し、夜は母校主催の晩餐会及び「盛岡賢治の会」主催の座談会に参加（参加者76名)。

＊昭和13年11月15日：玉山村渋民の「石川啄木の歌碑」を訪れる。

「やはらかに柳あをめる北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに」

この歌碑は啄木没後10年の命日（大正11年４月13日）に玉山村渋民（現盛岡市）に建立された。

甚次郎は当日早朝５時の汽車で「石川啄木の歌碑」を訪ねた。その後花巻に戻り、男女中等学校生徒を対象に「賢治の遺徳と聖者」について語り、即帰郷した。

＊昭和14年３月20日（写真１）

「宮澤賢治の会　明日夜開く」

宮澤賢治の会三月例会は廿一日（火）午後六時半から公会堂多賀で開催されるが会費は三十五銭、多数参会を希望してゐる。尚遺弟松田甚次郎氏は廿二日昼来盛、連隊訪問（注１）の上、夕六時花巻の農民道場（注：南城共働村塾）に向ふ。

注１：盛岡弘前野砲第八連隊にいた親友吉野新平を訪問

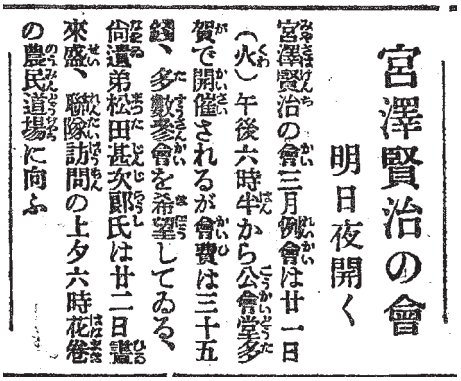
宮澤賢治の會
明日夜開く
宮澤賢治の會三月例會は廿一日（火）午後六時半から公會堂多賀で開催されるが會費は三十五錢、多數參會を希望してゐる、尚遺弟松田甚次郎氏は廿二日晝來盛、聯隊訪問の上夕六時花巻の農民道場に向ふ

写真1　宮澤賢治の会 明日夜開く
岩手日報（昭和14年３月20日）

＊昭和14年３月22日（写真２）

「けふから開設　二日間の日程決定」

故宮澤賢治氏の偉大なる農道精神を戴し郷土南城部落を振興し新しき模範農村建設を目指す稗貫郡花巻町南城振興共同村塾は南城小学校照井又右衛門先生の真摯な努力によつて廿二日から二日間開設されることになつたのは既に報ぜられたところであるが、照井氏は遠く山形鳥越に故賢治氏の遺訓を信奉して黙々農村振興に努力をつゞけつゝある松田甚次郎氏の許を訪ひその熱烈火と燃ゆる精神にいたく感激し、茲に松田氏の指導を乞ひ村塾開設となつたものであり、其の成果は期待される。二日間の行事日程は左の通り。尚松田氏は二十二日来県盛岡連隊（注：吉野新平）を訪問の上、花巻に向ひ村塾の指導に当たる筈である。

・二十二日（水）：集合（午前八時）、入塾式（同九時）、講義（十時―十二時）花巻町長県農林主事、精神歌練習（零時半）、講義（午後一時―三時）県社会主事（予定）（注：県係官佐藤公一：産業組合の振興論）、開塾（四時―六時）、精神歌練習（六時半）、講義（七時―八時）花農堀籠教諭、座談会（九時）（注：戦時下農民の覚悟）、修道夜会、

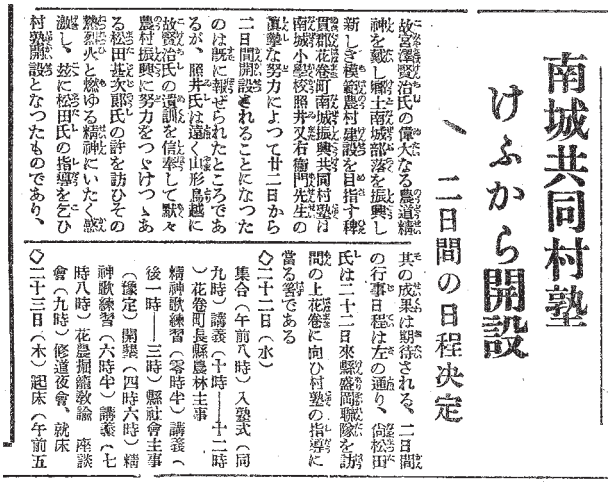
南城共同村塾
けふから開設
二日間の日程決定
故宮澤賢治氏の偉大なる農道精神を戴し郷土南城部落を振興し新しき模範農村建設を目指す稗貫郡花巻町南城振興共同村塾は南城小学校照井又右衛門先生の真摯な努力によつて廿二日から二日間開設されることになつたのは既に報ぜられたところであるが、照井氏は遠く山形鳥越に故賢治氏の遺訓を信奉して黙々農村振興に努力をつゞけつゝある松田甚次郎氏の許を訪ひその熱烈火と燃ゆる精神にいたく感激し、茲に松田氏の指導を乞ひ村塾開設となつたものであり、其の成果は期待される、二日間の行事日程は左の通り、尚松田氏は二十二日来県盛岡連隊を訪問の上花巻に向ひ村塾の指導に當る筈である
◇二十二日（水）
集合（午前八時）入塾式（同九時）講義（十時―十二時）花巻町長縣農林主事
精神歌練習（零時半）講義（後一時―三時）縣社會主事（豫定）開塾（四時六時）精神歌練習（六時半）講義（七時八時）花農堀籠教諭　座談會（九時）修道夜會　就床
◇二十三日（木）起床（午前五

写真2　けふから開設 二日間の日程決定
岩手日報（昭和14年３月22日）

就床

・二十三日（木）：起床（午前五時）（注：北上川で禊）、作業（六時）、朝食（七時）、精神歌練習（九時）、松田氏講義（十時―十二時）（注：農村振興について）、昼食（十二時）、精神歌練習（午後一時）、松田氏講義（二時）、退場式（三時）、家の光り大会（四時―）

＊昭和14年３月23日（写真３）：

「宮澤精神を体す 南城の共働村塾 昨日けふ二日間開設」

新しき模範農村の建設を目指して部落民が一致努力目標遂行に目覚しき活動を続けてゐる花巻町南城部落に農道精神の修養を目的に廿二日から二日間山形県新庄在鳥越共働村塾主松田甚次郎氏の指導を得て開設される。部落共働村塾の開塾式は廿二日朝九時から南城小学校に於いて県経済更生課佐藤農林主事、県連合青年団佐藤主事補両氏の臨席の下に、塾長照井又左衛門、副長及川亀治両氏以下塾生、遠くは江刺郡歌壇外近隣町村の中堅

宮澤精神を体す
南城の共働村塾
昨日けふ二日間開設

写真3　宮澤精神を体す 南城の共働村塾
昨日けふ二日間開設
岩手日報（昭和14年３月23日）

男女青年六十余名がゲートル、モンペ姿りりしく身を固め参列して盛大に挙行式は及川副長の熱ある開式の辞に次ぎ、修祓、国旗掲揚国歌二唱、一同参拝、勅語奉読、照井塾長、塾生総代伊藤留吉君宣誓、及川副長音頭で全塾生朗誦と型通りに進み天皇陛下彌栄を三唱して同十時閉式直ちに開塾第一日の行事に移つた。尚全塾生は当夜同校に合宿して夕食後は精神歌の練習、講義座談会、修道夜会等の行事を行ふ（写真は講義を受けてゐる塾生）。

＊昭和14年３月23日：岩手日報

「松田氏を囲む座談会　昨夕開く」(22)

南城振興村塾に指導の為来県の松田甚次郎氏を迎へての座談会は二十二日午後四時から県公会堂多賀に開かれた。参会者は高橋高農教授、三浦医専教授、福田岩手病院薬剤長、蒲生警部補、小田島孤舟、照井謹二郎、木口二郎、小泉一郎、大窪峻、同梅子夫妻、細川正次、鏑真二郎、遠藤幸子の諸子。

松田氏は「昨年こちらにまゐり皆さんからいろいろのお話を承はりあの時教えられた事により更に大きな力を得て鳥越にかへつてから記念館の建設に塾の開設に同志と共に山の木切り運搬から大工の仕事まで懸命にやり立派な会館を造り得たこと、宮澤先生の訓を体して真に献身の努力をして来る私は塾生の兄だといふ心もちで寝食を共にやつてゐる会には結城哀草果氏も出てくれたこの前の山形の会で啄木は偉いと思はぬが宮澤賢治は真にえらいと思ふ、皆さんはよくこの偉さを理解しなければならぬといふ話しがあつたが私達は真に先生の教へによつて土となり光となりみどりのしげるリズムとなつて散らなければならぬ。」と話され、農村問題についての質問に答へわづかの時間ながら尊い話しをなされ六時散会した。

＊昭和14年９月８日：甚次郎は最上共働村塾の塾生と一緒に東北旅行した際に花巻の賢治詩碑を訪ねる。

＊昭和14年11月７日：水沢にて「農村指導員講習会」を講演する。

＊昭和14年12月22日：胆沢郡南都田小学校で講演する。

＊昭和14年12月23日：花巻の賢治詩碑を参拝し、午後胆沢相去村青年団の講習会に出席する。

＊昭和15年２月24日：最上共働村塾の塾生と共に花巻を訪問。南城振興共働村塾第３回開塾で講演する。

＊昭和15年２月25日：南城振興共働村塾第３回塾で「農村振興体験発表会」で指導批評する。

＊昭和15年２月26日：花巻農学校及び赤石小学校で全校生に対し講演する。

＊昭和15年９月８日：南城振興共働村塾第４回で講演する。

＊昭和15年９月９日：南城小学校作業耕地サイロでインシレージ作製を指導。午後、盛岡市外中野村字門部落男女青年団及び部落民に講演する。

＊昭和15年９月10日：平泉を訪問する。

＊昭和17年９月２日：盛岡農学校を訪問し講演する。

菊地忠二（17）は、盛岡農学校（現岩手県立盛岡農業高等学校）２年の時、松田甚次郎を迎えた全校生の講演会に臨んだ。その時の甚次郎の印象について、「甚次郎はカーキ色の洗いざらしの作業服を着込んだ農村青年であり、内にこもった控えめな態度の奥底から、不思議に清潔な明るい気迫があふれて、私は今でもその人物の態度や話しぶりの印象が鮮やかである。その時彼は、農村運動について自己の体験をおりまぜながら講話し、農業はもとより数学なども学ぶのが大切であると語った。」と記している。

＊昭和17年９月21日：花巻賢治忌に出席する。賢治忌は賢治詩碑の前で毎年開催される。

＊昭和18年３月13日：花巻の宮澤家を弔問する。

＊昭和18年８月４日：甚次郎、花巻を訪問した５ヶ月後の８月４日に逝去する。「冬寒く雪降る奥羽の山里に道を求めて茲に一八年」

＊昭和18年８月５日：新庄鳥越部落で「松田甚次郎先生追悼会」が開催される。

＊昭和18年８月６日：新庄鳥越部落 如法寺において仏式葬儀を行なう。

＊昭和18年８月６日：花巻でも宗青寺において、賢治ゆかりの人々と南城振興共働村塾塾生による「松田甚次郎先生追悼会」が開催される。以下に宮澤清六と照井又左衛門の弔詞を記載。

＊昭和18年11月４日：甚次郎死後、村塾は閉鎖されその歴史を閉じる。

病床の甚次郎が宮澤清六に宛てた手紙（注１）(13)

「あれから熱が三十九度五分を前後して毎日苦しい病床、道場の生活も何も考えず、読まず、見ず、

遂今日迄九日がすぎました。もう何も欲しくない。平熱が欲しいだけであると謂いつづけて参りました。けれども昨日の午後二時より夕立があり、一時間、この乾き切った地上に慈雨が豊かに降りそそいでくれました。田にも畑にも山にもみな四〇日ぶりのこの慈雨、音と光りとにじっとして感謝をささげたのでした。

今朝は少し熱が下がり、机に向かって熱で疲労した指の関節部分の運動をして居ります。本日までに出さねばならない「時局情報」八月号の原稿五枚を、この熱の静かな時間に書こうと思って居ります。見前の吉田六太郎先生は毎日激励のハガキを下さいますが、この熱で一寸も動けないのです。では失礼します。　宮澤清六様

松田甚次郎

注１：甚次郎は昭和18年７月９日、同志や村民と「雨乞い祈願」で八森権現に登り無理がたたり病床につき、８月４日午前９時に逝去。この手紙は病に倒れて１週間後に書いたものである。

宮澤清六の弔詞　（７）

生涯を農に捧げ、土に俯してはまことの種子を播き、天を仰いでは無上の道を求められました松田甚次郎氏は、いま兜卒の天にのぼられて吾薩の位に入られました。堅く道を信じては疑と悩みを遮り、勤めて道を進んでは□を除き、偏に道を念じては邪の想を破り、明らかに聖□究めてはよく盲見を去られたのであります。八聖立道と謂ひ七覚分といひ、菩薩道と謂ふもまた松田氏の勤め修められた道ではありませんか。（※ 注：□は判読不明）

嗚呼今月の二十六日夜！共に日天子を岩手山の端に拝み奉ることも、また果無き夢と消え失せたのであります。いまは大循環の風と共に、銀河の彼方に飛び去つて、不退轉の位に入られましたあなたに、また何をか申上げることが出来ませう。いま私は激しい悲しみのなかで私が農村を、我が大日本國を益々強く守護せられ、われらを正しく指導せられんことをあなたに祈念し奉ります。

昭和十八年八月

岩手県花巻町　宮澤清六

照井又左衛門の弔詞　（７）

謹んで松田甚次郎先生の御霊前に申上げます。先生は吾が花巻町の農聖宮澤賢治の御子弟の関係から特に吾が花巻町南城共働村塾の開設に御援助下されました。昭和十四年三月開設以来如何なる御多忙なる年をも春秋二回は必ず御出で下さいまして或時は吾々と共に寒風肌さす冬の日禊を行い、或時は夏の炎天下に耕作を共にし、又或時は最も進歩せる農業技術の習得に農民文化の指導に只管農民魂の向上に重点を置き指導した下さいました。結果民にも漸く新興の氣風があらはれ作物の上にも脈々たる血潮が漲り始めたので御座います。

一例を申上げますならば四十幾町かの開田計画がなり、その半分の二十町歩が見事に開田がなり最早見事に出穂し始めて居ります。又一方蔬菜数十車の中央市場に出荷を見るなど着々と理想の建設に進みつゝありまして、之が先生の批判並びに指導を得べく来月才十回塾開塾に準備中のところ一昨日御逝去の電報を頂き暫しぼうぜんとしたのであります。今は先生は亡く、指導者を失つた吾々の塾も進路を失つた舟の様に全く絶望におちいるばかりでございます。しかし嘗て御来花の節の先生が熱血ほとばしるあの感激の一言一句は未だ耳新であり何で人々の魂をゆすぶり起こさずにおきませう。否吾々のみでなく偉大なる先生の教が全日本の農民の奮起を促さずにおきませうか。先生、先生が常に教へて下さいました皇國農民の行くべき道に向つて使命を全うせんことを誓ふものであります。茲に花巻賢治の會及び南城村塾を代表しまして謹んで弔辞を申上げます。

昭和十八年八月六日

花巻賢治の會、南城新興共働村塾

照井又左衛門

南城振興共働村塾

花巻の南城振興共働村塾は、甚次郎が出張して短期開塾した村塾である。農村の再建運動に執念を燃やしていた照井又左エ門（南城組合長）は照井謹二郎と計り、昭和14年３月22日から３日間、甚次郎を講師にまねき花巻市南城小学校で南城振興共働村塾を開塾した。各新聞に大きく取り上げられた結果、県内各地から多くの入塾者（119名）が参加した（13）。

南城振興共働村塾は山形における最上共働村塾の延長であり、農民精神の向上と農芸科学・農民文化の指導を目標としたものである。南城振興共働村塾においても最上共働村塾で日常実践している行動計画に沿って、早朝から様々な行事が行われた。

第１回の村塾では、甚次郎は「農村振興について」講演し、過去10年の生活体験を４時間半にわたり語った。内容は、村芝居による農民の啓蒙指導、隣保館建設、農産加工、託児所、敬老会、母の会、裁縫塾等の設置、精神鍛練の実践、農業経営主義と実践、最上共働村塾の設立、日本協働奉仕団の結成、農村啓蒙行脚等々である。

「私共の今までの共働事業は、実に苦闘の業績であった。加えて当局の厳重な取締りや注意をうけながら、赤貧と過労と戦いつゝ、あるいは悪口され、圧迫されながらも弱きを助け自己のために図らず、部落全体のために身を献じてきたのである。」と講演の最後を結んだ。参加者は大いに感激したという(13)。

甚次郎は、毎年欠かさず春と秋２回計７回、南城振興共働村塾に招かれて来花・指導した。また短期村塾のほか、県内外の村ゝを巡回して講演や懇談を行う「農村啓蒙行脚」は、亡くなる迄の６年間に百数十回にも及んだ。

日本国民高等学校へ入学：加藤完治に学ぶ

国民高等学校（フォルケホイスコーレ）

デンマーク（創始者グルントヴィ）で発祥した「フォルケホイスコーレ（Folkehøjskole）」は、農村を中心に全国各地で設立され、あらゆる階層の青年を対象にした社会教育私塾で、全寮制・短期定時制の講習会を中心とした。グルントヴィは「国家は民衆である農民が主体的に担うべきである」と考え、そのためには農民に高度な教育が必要であるとした。デンマーク語の「フォルケホイスコーレ」は「国民高等学校」であるが、実質的には民衆の大多数である農民を相手とし農業の実技実習に重点を置く教育制度であるので「農民高等学校」とも呼ばれた。日本でも大正時代から昭和初期にかけて「国民高等学校」と訳され、全国に設立された。デンマークでは農民高等学校で教育を受けた卒業生たちの活躍によって、農業（特に酪農）を主体とする自立した民主国家となることに成功。そのため農民高等学校制度は高く評価され諸外国にも大きな影響を与えた。

加藤完治の「日本国民高等学校」

加藤完治（明治17年～昭和42年）（教育家・農本主義者・日本国民高等学校校長・満蒙開拓移民の指導者）の日本国民高等学校は、このデンマークの実践をモデルにしたものである。

山形県立自治講習所の初代所長であった加藤完治は、昭和２年茨城県友部に設立された日本国民高等学校の校長となり、我が国における国民高等学校運動の推進役であった。日本国民高等学校では「早朝禊をおこない農場で汗を流して働き人格を錬磨し、知性の啓発に励む。土を開墾する精神こそ農民魂である。農村問題の解決は人である。」との農本主義思想のもとで実践的農民教育が行われた。

その背景には加藤完治の古神道による天皇を中心とする皇道主義があり、「天皇を中心として農業を発展させ大和魂即日本農民魂を鍛練し、以つて農村の発達と農民文明を建設する。」という「天皇制農本主義」を基本理念とした。教育内容としては、もっぱら農業技術の修得実務に重点がおかれたが、農業理論の学習や社会教養の教育は軽視され、デンマークの農民高等学校とは全く異なるものであった(16)。

加藤完治は、昭和７年以降満州国建国にともない満蒙開拓移民の仕事を進めた。昭和13年には満蒙開拓青年義勇隊訓練所を開設して中央訓練所長を兼ね、中国侵略に伴う満蒙開拓の移民に力を注いだ。加藤完治は国民高等学校の生徒の内、特に農家の次三男を中国大陸へ移民として送り込み、その数は８万名以上に及び、そのうち約３割が満州の荒野で悲惨な最期をとげたという（21)。

デンマークの国民高等学校本来の理念は「校長の人格を教育の基本とする民営の全寮制私塾」であるが、現実には古神道に基づく皇道主義・農本主義思想を鼓吹する加藤完治の国民高等学校の教育方針は、デンマークの理念から大きく外れ、満蒙開拓に加担し軍国主義の時流に飲み込まれて行った。そこには加藤完治自身が積極的に行動した面もあるが、彼の皇道主義・農本主義思想が戦時体制の国策に利用された一面もある。加藤完治は戦後昭和21年に教職追放された。

甚次郎、日本国民高等学校に入学

甚次郎は、昭和３年４月、加藤完治の日本国民高等学校に入学、「立国の基礎を農業におく」という加藤完治の農本主義思想に共鳴した。在校中、甚次郎は新しい農業技術の修得と農民としての自覚「農民魂」を植え込まれる（13)。昭和４年１月、１年間の訓練を終えて国民高等学校を修了して鳥越に帰る。

帰郷した甚次郎は、昭和７年、賢治の羅須地人協会に倣って最上共働村塾を開設した。最上共働村塾設立の趣意「第一回の村塾に草案した塾の設立趣意書の要綱」に見られるように、甚次郎は「荒廃した農村の救済」という使命を自己に課し、「共働による私塾」での青年育成に向け生涯献身した。

「社会の基本である農村を興隆させるには農村に真摯な人物、本物の人間が必要である。村塾は人格教育であり勤労教育であり生活の訓練の場であり、村を愛し土を愛し隣人を愛し真理を探究する若人たちと生活と勤労を共有し、各自の個性能力を確認する。このような人格的な努力奉仕から、やがて我が国民文化の建設と農民道が確立する。」と加藤完治

とは異なる「共働村塾の理念」を述べている。

甚次郎は実践として精神鍛練が重要であるとの考えで、日常生活に様々なことを取り入れた。朝起（早寝早起き）、禊（禊の精神：身の清めと忍耐の涵養）、裸参り（精神力の涵養）、断食（精神の根本的更生）、精進食（穀類豆野菜の精進食で身体爽快、丹田の修業）、徒歩駈足（土を踏み歩き駆けることは堅忍持久と肉体強靱に重要）。罪や穢れを落とし自らを清らかにすることを目的とする禊（水垢離）は、村塾の重要な日課であった。甚次郎は、神社中心に、これらの精神鍛練を実践し生活することの重要性を述べ、その精神鍛練は「皇道精神の真髄に即応する」と説いている（1）。

最上共働村塾設立の趣意の中に「次三男の青年に、満鮮の荒野に耕作出来る拓殖訓練を授け、強烈な皇国精神の発動を以つて、農村のどん底の立場や、不景気、失業苦のない明るい社会を招来するまで努めなければならない。各々の立場を意識的に分担し、お互いに信じ、共働し、隣保し、以つて日本農村を全人類に先駆する正しい皇道日本としなければならない。」との記述が見られる（1）。

このような発想は、日本国民高等学校在学中に加藤完治の農本主義から影響を受けたためであるが、甚次郎の最上共働村塾の実態は、基本的には加藤完治の農本主義とは相容れないものであった。つまり「共働村塾」は甚次郎ら若者たちの「自治と共働」との考えから誕生し、農本主義でもあくまで「土の人・耕す人」としての教育と実践が基本であった。甚次郎は終生、土を耕し土を肥す百姓であり、土から離れることはなかった。文字通り「共に働く」が塾の思想であり、塾生一人一人の境遇や個性を尊重し、人間を一つの鋳型にはめるような教育はしなかった。

既に述べたが、甚次郎は《賢治から「小作人たれ、農民として真に生くるには、まず真の小作人たることだ。小作人となつて粗衣粗食、過労と更に加はる社会的経済的圧迫を体験することが出来たら、必ず人間の真面目が顕現される。黙つて十年間、誰が何と言はうと、実行し続けてくれ。そして十年後に、宮澤が言つた事が真理かどうかを批判してくれ。今はこの宮澤を信じて、実行してくれ》と諭され、「私は先覚の師、宮澤先生をただただ信じ切った。」

この賢治の諭しこそ、甚次郎の生涯及び共働村塾のよって立つ精神であった。甚次郎は常日頃「我等の真の塾長は宮澤先生である」と語っていたように、村塾の中心には賢治が存在していた。

沼澤治雄は追悼で次の様に述べている。「松田先生は当時、鳥越は元より、全国就中農村の全部が貧農で、疲弊困憊の極みにあったとき、少しでも農民の苦しみを救わんと、宮沢賢治先生を釈尊と仰ぎながら、鳥越はもとより近隣の村々を廻り、求められる儘に全国に信念を説き歩かれた。」（9）。

昭和13年花巻の賢治詩碑の前で、甚次郎が語った言葉は印象的である。「私は宮澤賢治先生の一弟子である。そして私には先生と満十年の一約定があつた。それは小作人たれ・農村劇をやれ、その説明は為さないけれどもそれを実行したならば十ヶ年後には必ず報告してくれよとの事であつた。昭和十三年はもう満十ヶ年である。」（6）

「この先生の弟子である私共余りに先生の教を守れなかつた。十年間黙つて俺の言う事を実行して見てから、その結果を報告せよといはれたのであつたが、余りいい報告も出来なかつた。」（6）

また昭和14年３月20日の村塾修了式で、修了生８名に贈った言葉からも、甚次郎が賢治を生涯の師として如何に尊敬していたか窺える。

「君達はここに塾の冬期生を修了し、向後、郷里に、或は軍人として海の彼方に活躍するのであるが、宮澤先生は何処にでも居られて、常に教を垂れて居る事を信じられるでせう。君達がほんたうに宮澤先生の弟子になりきることは、同時に、ほんたうに永久に私と兄弟になり切る事であるから、共々に宮澤先生を生かし得る弟子たることを誓約しよう。」と語って、心からはげまし、見送ったという（6）。

甚次郎の「鳥越倶楽部」や「最上共働村塾」の活動は、一時左翼的危険思想と疑われ警察にマークされた。しかし甚次郎の運動を利用しようと高松宮家より出された「有栖川宮記念厚生資金」の授与によって、状況は一変した。甚次郎の危険思想は解消され、その活動はむしろ評価されることになる（13）。

甚次郎の農本主義の根底には、加藤完治の「天皇制崇拝に結びつく農本主義」をはらんでいたので、その活動は満蒙開拓の推進や第２次世界大戦の戦意高揚など政治利用された。しかし「土の人」甚次郎は、それらの国策に距離をおき自らは加担することはなかった。

「岩手国民高等学校」の開催

大正15年には花巻農学校でフォルケホイスコーレにならった合宿講座「岩手国民高等学校」が開催（大正15年１月10日～同年３月27日）され、花巻農学校教師の賢治も兼任講師として参加し農民芸術論などを受けもった（16, 19）。花巻の岩手国民高等学校では、自主的なデンマーク式教育は行われず、教育方針は加藤完治の「皇国の興隆と弥栄を期する人物の養成を目的とし、戦時体制下の食糧増産と満州移民

のための精神的訓練を目指した皇道主義的な農本主義」であり、いわば官製（国策）の皇国運動（やまとばたらき）の性格を帯び、そのためかこれが岩手における最初で最後となった（16）。その後、皇国精神を発揚する皇国運動は六原道場に引き継がれた。

賢治と甚次郎の作品：戦意高揚への歪曲利用

賢治の有名な詩「雨ニモマケズ」も満蒙開拓の推進や戦意高揚など権力に利用される危険性をもっていた。「雨ニモマケズ」の中の「アラユルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズニ」という「忘己・無我」の精神や「慾ハナク」の言葉は、戦時下の「滅私奉公」「欲しがりません勝つまでは」のスローガンと結びつけられ、「賢治農聖化」「賢治聖人化」と合せて、訓話や教科書にも採用された（10）。

賢治や甚次郎の活動や作品が戦意高揚・戦争協力に歪曲利用されたことは、本人の意志とは全く関係ないことである。特に甚次郎に対しては「村塾の経営とその自給自足主義や農民劇は賢治の教えの実践とみられるが、しかし時流に乗り、国策におもね、そのことで虚名を流した。」と誹謗中傷された（12）。甚次郎の活動に対する評価については検証する必要があろう。

次報では、甚次郎と賢治との邂逅、「百姓賢治」と「百姓甚次郎」の農民運動、賢治の法華経信仰などについて述べる。

参考資料

1）土に叫ぶ：松田甚次郎、羽田書店、（昭和13年５月初版発行）（昭和22年６月：改訂第１刷発行）
2）同窓会報 第50号：75（昭和13年８月）
3）同窓会報 第51号：13/57（昭和13年12月）
4）宮澤賢治名作選（上・下）：松田甚次郎編、羽田書店、（昭和14年３月初版発行）（昭和24年６月：第13刷発行）：文部省推選
5）同窓会報 第53号：119（昭和15年２月）
6）村塾建設の記：松田甚次郎、実業之日本社、68/75/103-112/123/172/249（昭和16年１月）
7）追悼 義農松田甚次郎先生：吉田六太郎編、14（昭和19年３月）
https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/416e0671edda9e3cb71ab7bef62b1fcf
8）野の教師 宮沢賢治：森 荘已池、普通社、204（昭和35年11月）
9）和光 追悼の詩：松田むつ子編集発行、48（昭和55年11月）
10）宮澤賢治論：西田良子、桜楓社、166（昭和56年４月）
11）宮沢賢治―地人への道―：佐藤 成、川嶋印刷、317-318（昭和59年10月）
12）修羅の渚―宮沢賢治拾遺―：真壁 仁、秋田書房、13-16（昭和60年８月）
13）賢治精神の実践―松田甚次郎の共働村塾：安藤玉治、農文協、10/76-140/154-166/177-180/218-220（平成４年７月）
14）陸羽132号：安藤恭子、宮沢賢治ハンドブック、天沢退二郎編、新書館、212（平成８年６月）
15）宮沢賢治小私考―稲品種改良分野からのアプローチ―：佐々木多喜雄、北農 第73巻 第１号、84-98（平成18年１月）
16）私の賢治散歩 上巻：菊地忠二、新生会、245-293（平成18年３月）
17）私の賢治散歩 下巻：菊地忠二、新生会、15-18（平成18年３月）
18）宮沢賢治と陸羽132号の関係（あすこの田はねえ）：原子内 貢、岩手の地学第52号、岩手県地学教育研究会、１-11（令和４年）
19）北水会報 第142号（令和４年１月）
20）北水会報 第143号：北水会発足100周年記念特集号（令和４年12月）
21）https://ja.wikipedia.org/wiki/加藤完治、
https://blog.goo.ne.jp/suzukikeimori/e/74e5d19af288605e24221117b65de075
https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/9706be2bbe9377ab426e91bb4bf03279
22）南城振興共働村塾 -宮澤賢治の里より
https://blog.goo.ne.jp/suzukikeimori/e/d12c4c2808b14a934a4b5ec20d57bafc